

編輯後記

— この近松名作集は、黒木勘藏氏が二十年不斷の専門的研鑽の總合的結果であると申せば、最もよく眞實を語つてゐます。編輯部の私共の仕事は、全體の眞價から申せばまことに微かなものであります。

— この本の校訂上の責任は全然黒木氏にありますが、その校訂原稿を活字にする上に就いての校正上の責任は、全然私共編輯部が負はねばなりません。そして、それが如何に至難の業であつたかは、今日からして振返つてみるだけでも息苦しきを感じるばかりであります。近松の淨瑠璃が文字づかひも、詞づかひも、全く別格の特殊文學であることは今更申すまでもありませんが、その特別

さが、普通の文章とは随分かけ離れた特別さであるので、誤植であるか、誤植でないかどうかしても分らぬ場合が生じ、原本と對抗するか、校訂者の黒木氏にたゞすかせねば安心のいかぬ箇所が隨所に出て來るには弱りました。それらの一例は、書物愛第四號に「誤植の如くして誤植でない實例」として掲載致しますから御一覽を願ひます。

— 尤も、淨瑠璃研究の専門家から見れば、さういふことはバカ／＼しいことかも知れませんが、私共の頭には常に大多數の會員が浮んで居ります、事實おそらくその大多數の會員は淨瑠璃に關して、さやうに専門的知識を持たるゝものと推定することが出來ないからであります。さういふ頭から申しますと、例へば有朋堂文庫や國民文庫等が、すでに致してゐるやうに、これを音曲藝術としての淨瑠璃の臺本として取扱はず、「フシ」とか、

「地」とかいふものをマキにした、一種の讀本よみほんとしてしまつた方がなども、實は少しニゲを打つ下心もあつて、黒木氏に持掛けてみたこともありましたが、それは一言のもとに却下されて、さて、かうして苦しんで來てみると、やはり骨が折れただけ、それだけ奥行のあるこゝろよさを覺えます。と同時にまた免れがたきは校正上のおちで、或は後になつて發見さるゝ誤植があらうかと、その公の審判を受くることの怖しさをも感ぜずにはゐられませぬ。極めて些細のことでも、お氣つきのところは嚴達下さるやうお願いいたします。何等かの方法で是正いたします。

一 近松物には挿繪の材料が、いかにも稀有なので困りました。これは黒木氏に願ひして、あらん限り、いれさしていただくやうに致したのですが、思はしい材料はないさうで、結局御覽のごときも

のにとゞめました。それでも從來の覆刻本から見たら、かなりの豊富さであります。第一回配本の「黄表紙廿五種」には色刷の口繪も二枚も入れたこととであり、これにもゼヒと思つたのですが、これも然るべき材料がないので、かへつて無理に縁遠いものを持たむよりはといふので省くことに致しました。決して勞費を惜んだものではありません。止むを得なかつたのです。序に申上げますが、第七卷、第八卷の「淨瑠璃名作集」には、挿繪の材料も澤山ありますから、かなり賑かになります。

一 「堀河波の鼓」丸本全部そつくり原形で収録して、これに校訂組を頭註にしたごときに見ても、勞費を惜まず、何事も進んで難事を仕遂げて見ようとする私共の熱心さを御了解下さることと存じます。

一 丸本三十種その一つを切放しても一冊子をな

すべきものを、まるごなしに此一冊に収めたといふことも、またそろ／＼自慢になります。黒木氏の校訂の御骨折は申すまでもなく、粗版、校正その他いろ／＼の點で大變な仕事ではありました。そこにまた一冊を以て他書の三冊四冊分の内容を盛らうとする私共の根本の方針から来る特色がありますので、従つて文字が小さいといふことや、天地左右の餘白が少いといふやうなことは、どうしても免れません。卒直に申せば、近松物のやうな、むづかしい、どちらかといへば専門的な文學は、いくら活字を大きくしても、今日大多數の人に必ず通讀さるゝ性質のものではないかとも思ひます。或る機會の興味にひかれ、また或る時の必要に迫つて、はじめて精讀され、しかも精讀するに従つていよ／＼深きあじはひを見出すといふ風のものであらうといふやうなことから、多少

文字は小さくも、凡そ近松の名作と稱せられるものは、悉くこの上下二卷に収録しておく方が、結局多くの人に多くの便利を與へるであらうといふことになつて、強ひて黒木氏の勞をわづらはし、その餘き研究の收穫を、かくの如く、いはゞ虐待してつめ込んだ次第であります。こゝに校訂者並に近松研究の同好者に陳謝すると同時に、大多數の會員諸氏の御満足を期待祈念して、この筆を措きます。

日本名著全集刊行會

編輯部謹記